

といひ聞かせますと、氣の早い三吉は、

『お父様！ 何しろこれはよい話です、福の神が舞ひ込みました、さア早くいつて掘つて見ませう』

と急げば、四郎も同じやうに、

『地の下五尺ぐらゐ、何でも無い事です。私達三人でやつたなら、物の一時間ともかゝりますまい』

いふので甚六は、ホク／＼もの、

『ウム、掘る段になつたら造作なしさ、併し先づ酒でも買つて、一つ前祝でもやらうぢやないか、他のことなら知らず、家内中が知つてるだけだ、他人が先がけして掘り出す心配もあるまい』

と、女房を酒屋へ走らせて、神棚に神酒を供へ、めい／＼一杯づつ飲んで、直ぐに鋤や鍬を用意して、豆畑へと出かけて行きました。

豆畑には一面に、青々と豆の葉が茂つてゐて、やがて花も咲き、實もなりさうなので、甚六は一寸考へて、

『何だか惜しいやうな氣もするよ、折角作つた豆を引き抜いてしまふのは、いつその豆がすつかり實つてからにしようか』

と、いひ出しますと、三吉は早くも豆に手をかけて、

『お父様！ そんなに氣長いつてちや駄目ですよ、こゝの地面から錢瓶を掘り出さうものなら、豆の一斗や二斗は何でもないぢやありませんか、さア／＼引きぬいて掘りませう』

と勧めると、弟の四郎も同じやうに、

『さうだ／＼、こんな豆なんざどう成つても構やしない、錢瓶さへ掘り當てたら、家は忽ちお金持に成るんだから』
と、畑の隅の方から、だん／＼引きぬきにかゝりました。

かう成つては甚六も不賛成をいふ譯に參りませんから、

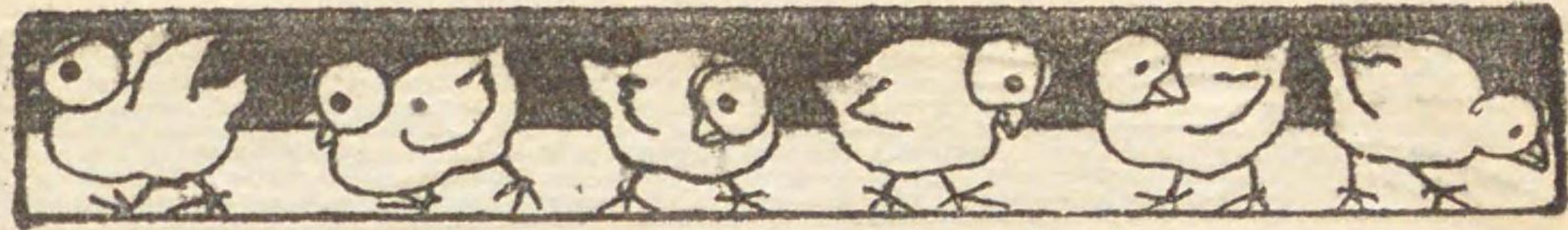
『ぢやア仕方がない、みんな引き抜いてすてゝしまへ』
と、三人呼吸を合せて、手當り次第に豆を抜きすてました。

四

何分廣い畑ですから、豆を抜き取るだけでも相當に骨が折れます。けれども三人は、早く錢瓶にありつき度いと思ひますので、夢中になつて仕事を進めて居りました。

すると其所へ顔知りの八藏といふ百姓が通りかゝつて、此の有様を見るより、目を圓くして、

『ヤレ／＼甚六さん、お前さんはまア此の豆をどう成さるのか、折角あれまでに作つたのを、今ぬいてすてるとは、まア惜しいものぢ



やありませんか』

と、不思議さうに訊ねかけました。甚六はニコ／＼して、事の理由を打ち明けようとし、三吉と四郎とが、甚六に耳打して、『お父様！ 滅多なことを、人に喋つては駄目ですよ、錢瓶を掘り出して、家へ持つて歸るまでは、誰にだつて、内證にして置かねばなりません』

と、注意をしましたので、甚六も成る程と思ひ、わざととぼけた顔をして、

『ナニ實は、お前さん！ 私も惜しいと思ひますが、急に此の畑を使ひ度いことが起りまして、今朝も今朝と、悴たちと相談をして、折角作つた豆を、みんな抜いてすてることにしましたので……』
と、きいて八藏は、首を傾げて、

『まあ何だか知らないが、惜しいものですなア、私の家の馬に食べさせます、少しばかり貰つて行きませうか』

と、抜きすて、ある豆の葉を掻き集めようとします。

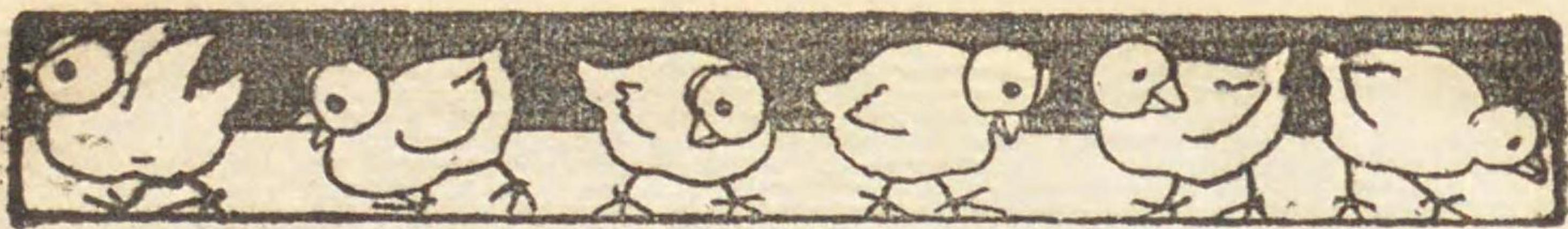
不用のものですから、いやだともいへませんが、甚六にしては厄介な男がやつて來たと思ひまして、

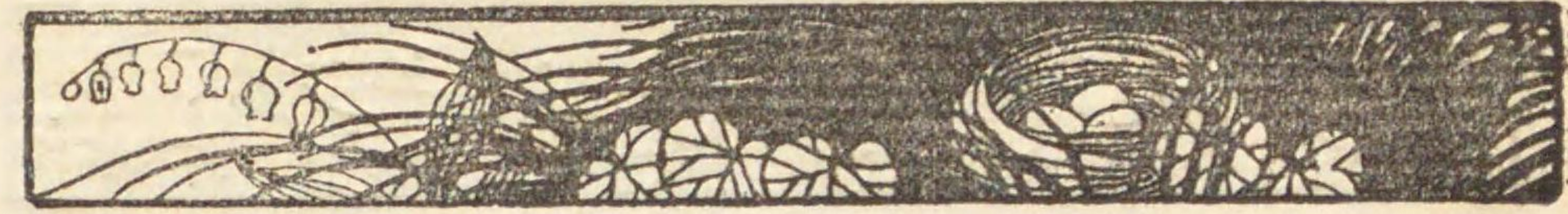
『エ、いくらでもお持ち下さい、どうぞ澤山に、エ、どうせ不用なものです』

と、生返事をして居ました。

三吉と四郎とは、其間に畑中の豆を残らず引きぬいて、一寸一休みして汗を拭きました。八藏は手に持てるだけの豆の葉を貰ひ受けて、

『甚六さんどうも有り難う、おかげで家の馬が太りますよ』





と、其まゝ行つてしまひましたから、甚六は二人の息子に、『どうも厄介なお客が飛び込んで来て呉れて、大きに時間をつぶされた、さア誰も見てゐない間に、掘つたりく』と、仕事を急がせました。

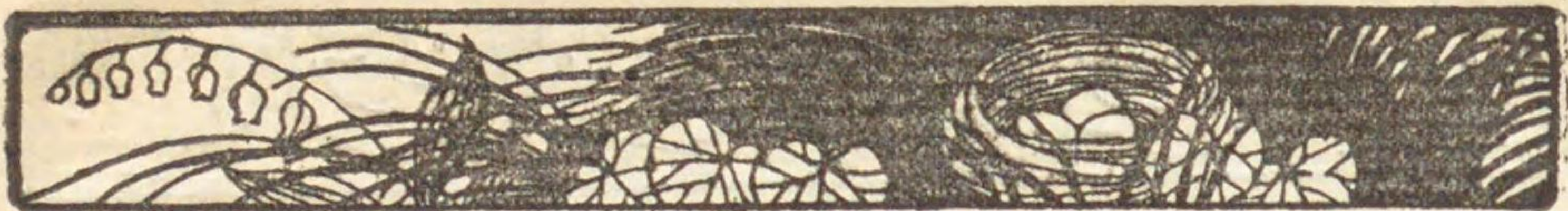
三吉も四郎も、一刻も早く錢瓶を掘り當てようと思ひますから、鍬の先に力を入れて、いつになく、三倍も四倍もの働きをしました。それで見るくうち、もう五尺ほど掘り下げましたが、どうも瓶らしいものは見當りません。例の氣早の三吉は、『こりや見當が違ふらしいぞ、一體畑の中のどの邊にあるんだい』と、少しくぢれ出しますと、甚六も迷惑さうに、『さア、畑の中とはかりで、どの邊だか聞いて置かなかつた、神様も少々不注意だつたなア』

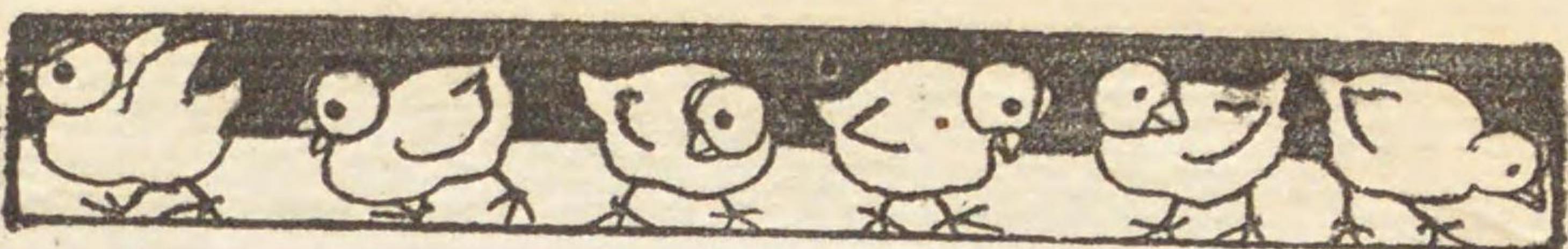
と、苦しさうに鍬の手を休めるのでした。

五

そこで三吉と四郎とは、又相談をして、『こりや別の地面を掘らねばなるまい、まアよいさ、今日一日かゝつて、彼方此方と掘つて見るさ』と、二人は呼吸を合せて、疲れたやうな顔も見せず、こゝだと思ふ所を、いくつも掘つて見ましたが、錢瓶はおろか、青錢一つ出て來ませんでした。

甚六は少しく失望して、『駄目だよ、何分夢に見たことだもの、さうく的には成らない、それに日も暮れかけたから、今日は止めにして歸らうではないか』





と、いひ出しました。

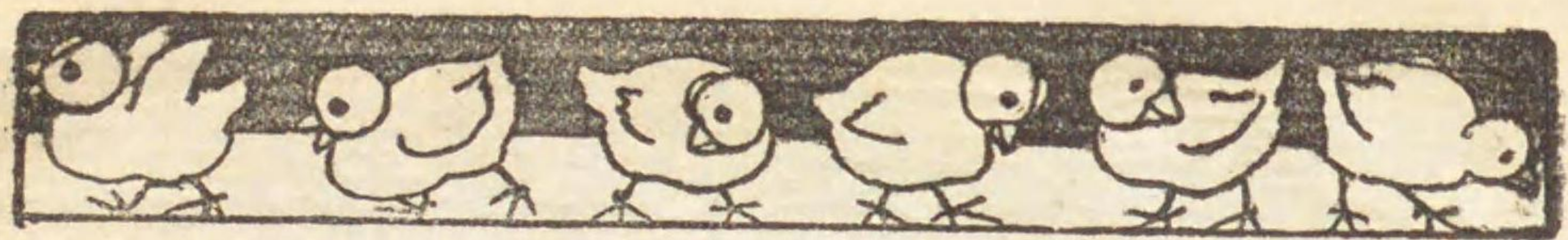
二人の悴は、日のある内にと一生懸命に精出して働きましたが、
どうも思ふやうに見つかりませんから、がっかりした様子で、

『さうだ、こりや出直した方がよい、又明日といふ日もあるんだ、
急がずに掘つて居たら、其内には見付かるだらう』

『それに今夜ごろは、又何とか神様の御注意もあるだらう、日が暮
れたのでは、目先も暗くて、思ふやうに仕事が出来ない、歸らう歸
らう』

と、コソ／＼と畑を出て、一旦家へと引き上げました。

三人共に、今日の失敗は、あまり馬鹿々々しく、こんなことが他
人に知れようものなら、それこそよい物笑ひの種になるからと、皆
で申し合せて、一切内證にして置くことに致しました。



『明日は屹度掘り當てるぞ、なんの、もう一息だよ』

『ウム、今夜は屹度場所のお示しがあるに違ひない、さうすれば明
日の仕事は案外楽なものさ』

と、親子の者は、内々で、今夜の夢を楽しみに、ぐつすり寝入つ
てしまひました。

すると案の定、其夜中頃に、例の貴人が、甚六の枕頭に現はれて、
『甚六！ よく聞け、お前は少し短氣で困るよ、今日一日働いたば

かりで、神の言葉を疑ふふやうでは駄目だ。錢瓶は、確かにあの畑
の地の底五尺にあるのだが、それに就いては、先づ充分に土地の人
達に御馳走をして、福運の向いて来たことを喜ばねばならぬ、自分
だけでよい事をしやうと思ふのは、大きに間違つて居る、よいか解

つたか』

と、諭されて甚六は、成るほどと思ひ、又もや両手を合せて、
『神様！ よく教へて下さいました。仰せのことは一々御尤もで御座りまする、就きましては明日早速に、村の知人を招ぎまして、祝を致すでありませう』

と、恐るゝ答へますと、貴人も満足したやうに、

『ウム、それがよい、必ず忘れるな』

と、見るゝ其姿を消してしまひました。

六

夜の明けるのを待ちかねて、三吉と四郎とは、一緒に目を覺ました。

『どうだ、昨夜は神様がいらしたかい』

三吉はかういつて四郎にたづねますと、四郎は頭をかいて、

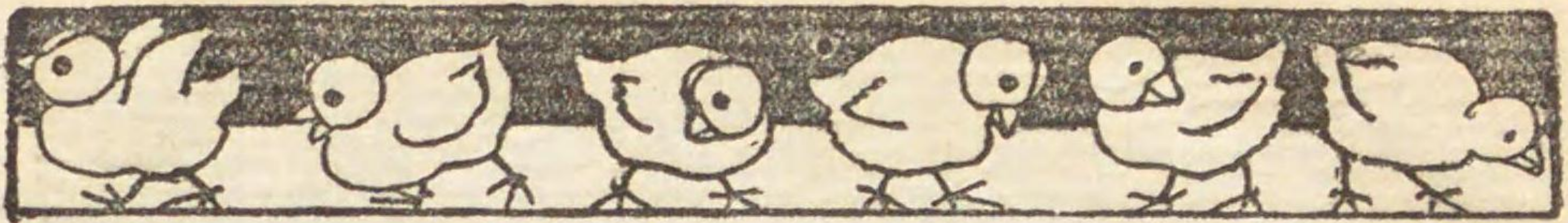
『残念ながら、ぐつすり寝込んでしまつたので、何の夢も見なかつた』

と、悄氣返りますと、三吉も同じやうに、

『俺も同じことよ、實に申譯がない、神様が來られたかも知れないが、何分よく眠つたので、夢も見ないうちに、もう夜が明けてしまつたのさ』

と、これも頭ばかりかいてゐます。
すると四郎は考へて、

『お父様の所へは、神様が來られたかも知れない、一つきいて見よう』
と、兄を慰めて、甚六の起き出すのを待ち構へ、二人揃つて、



「お父様！ お早う御座います。昨夜は神様の別のお諭しがありましたか、私達はすっかり寝込んでしまつて、たうとう神様に逢はれませんでした」

と、急ぎ込んで訊ねますと、甚六はニコ／＼して、

「ウム、昨夜も神様が出て來られて、たしかにあの畑にあるといはれたよ」

きいて二人は飛び立つ思ひ、

「さうでしたか、それは有り難い、ところで神様は、どの邊にあると仰しやいましたか」

問はれて甚六は、一寸首を傾げながら、

「まあ静かにしろ、神様のお言葉も大きに御尤もだよ」

と、考へ込みます。三吉は我慢がならず、膝のり進めて、

「お父様、神様はどんな事仰しやいましたか、何か又新しい問題でも出たのでせうか」

と、心配さうに訊ねかけますと、甚六は手をふり／＼、

「なアに、心配はないよ、つまりかういふ事は、近所の人々にも、

喜びを分たねばならん。それで先づ錢瓶を掘り出す前に、大勢の人

を集めて、祝ひの酒宴をするがよいと、神様はこんなに仰しやるの

さ、いかにも聞いて見ると御尤もの事だね」

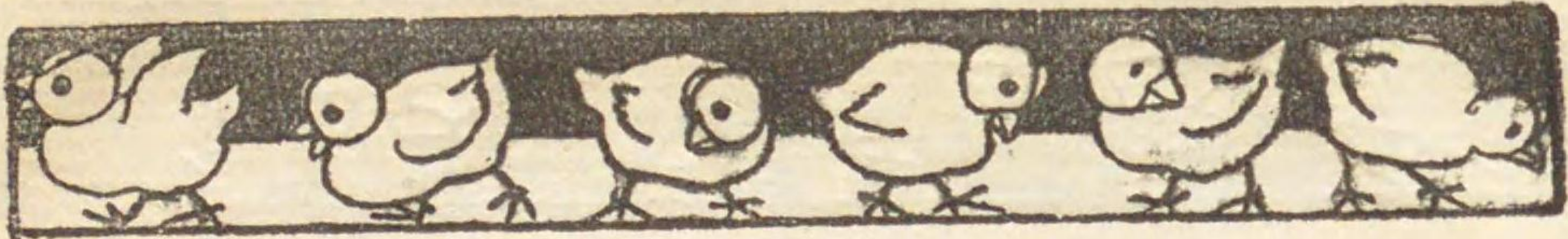
と、こゝで昨夜の夢の次第を打ち明けますと、三吉も四郎も、

「いかにも、成る程」

「尤もなことでありますな」

と、感心してしまひました。

かくて甚六の家では、俄かに用意をして、酒肴を買ひ整へ、心を



こめた祝の酒宴がはじまりました。

村の人達は、甚六の招待を受けて、お目出度いくくと、みんなドヤ〜集つて来たのです。

七

今日招かれた人の中には、昨日豆の葉を貰つた八藏もゐました。

八藏は甚六から理由を聞かされて、びつくりしました。

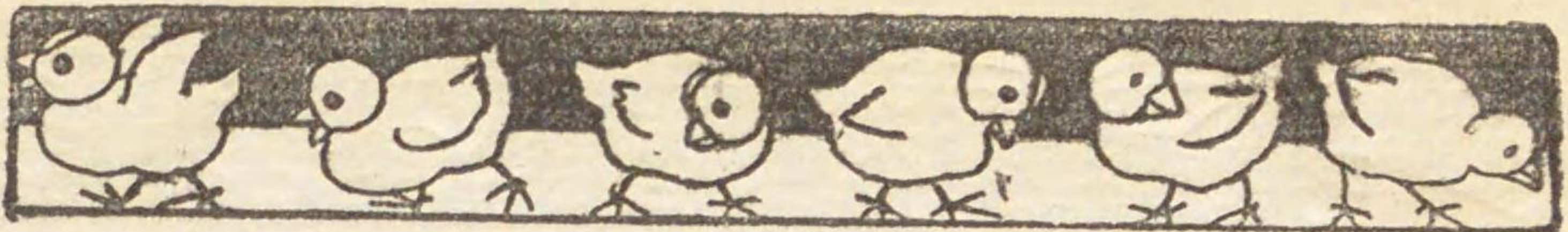
『甚六どん、大した福の神が舞ひ込みましたな、どうも昨日の豆畑の様子、三人共只ではないと思ひましたが、フーン、やつぱりさういふ問題でありましたか、まアお目出度い、いづれ錢瓶が出ましたら、又御馳走が頂かれますな、へエ、どうも有り難いことで、イヤ、お目出度う御座りやす』

と、頻りにお世辭をいひました。三吉と四郎とは、お客様の接待をして、お酒をついだり、肴を運んだり、目の廻るほど忙しい思ひをしました。

そこで座中の重だつた一人が、皆のお客に向つて、

『さて皆様に御相談を致しますが、甚六さんの家へは、よい福の神が舞ひ込んで、今度其福を掘り出すことゝなりました。就きましては私共も、かうしてお祝ひの御馳走に成つたからは、只で済まされたい。明日は一つみんなで力を合せて、甚六さんの豆畑を掘つて見ようぢやありませんか。御承知の通りあの畑は、なか〜広い地面です、どうも甚六さん親子の力だけでは、仕事の捗が行くまいやうに思ひます』

と、こんなに云ひ出しますと、一同の者も直ぐに賛成して、



『それは至極結構なこと、思ひます。私共も出来るだけのお手助けを致しませう』

『人を助けて置けば又よい事があります。かういふことは願つてもやり度いと存じます』

と、心よく申しますので、甚六の喜び一方ならず、

『いろ／＼と御親切にいつて下さいまして、此の上の喜びはありません。いづれ幸ひに思ひ通り錢瓶を掘りあてましたら、其場合には又改めてお禮を致します』

と、もはやすつかり大金持に成つたやうなつもりで、得意の鼻を高くして居りました。

かくて其翌日に成りますと、甚六は朝から仕度を整へて、二人の俸と一緒に、例の豆畑へ出向きました。

村の人達は、鋤をかついだり、鍬を持つたりして、

『さア今日は甚六さんの畑から寶物が出るんだ、俺達もお手傳ひをして、五錢でも十錢でも儲けなくちや』

『さうだ、かういふ結構なことは、又とありやしないぞ』
と、ゾロ／＼出かけて行きました。すると此の噂を傳へきいた近

村の者までが、

『畑の中から寶物が出るとやら、見物するだけでも面白い、ヤレ行け、ソレ行け』

と、老人も子供も、男も女も、蟻の行列のやうに、ゾロ／＼と甚六の豆畑へ集つて來ました。

八



さて豆畑を掘りはじめました。今日は大勢の人々が、氣を揃へて掘るのですから、其早さは驚くばかり、彼方でも此方でも、二尺三尺と掘り下げて、見る／＼うちに五尺ほど掘り下げました。すると又彼方からも此方からも、

『オイ、出たぞ／＼』

『こつちにも出たぞ』

『俺の方は迎もすばらしいぞ』

と、威勢のよい呼び聲がします。甚六は目を廻さんばかり、

『そんなに澤山錢瓶が出るとは、どうも不思議だ』

と、呼ぶ方へいつて見ると、何のことも、出たのは瓶でなく、土に錆びついた銅錢が、一つ二つあるばかり、みんな集めたところで、高が五錢か十錢に過ぎません。

兎角するうちに、日が暮れましたから、見物人も手傳の人達も、

何だか氣抜けしたやうに、

『馬鹿々々しいことをした、これぢやア丸で狐につまゝれたやうだ』

『さうよ、忙しい日を潰して、餘計な疲勞を儲けたぞ、あゝ約らな

い／＼』

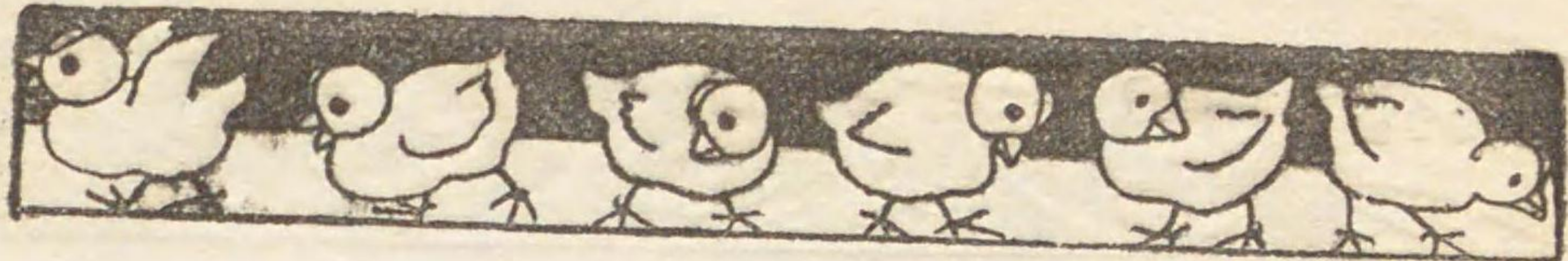
と、小言だら／＼、家へ歸つてしまひました。

甚六は三吉と四郎とに向つて、

『さア、今日はもう止めにして置かう、また明日といふ日があるからよ』

と、鍬の土を拂ひ落し、拾ひ集めた銅錢を算へてみますと、それでも五十錢ばかりありましたから、

『兎に角も豆畑から銅錢の出ることが奇態だ、これは恐らく地の底



の錢瓶ぜにがめから、あふれ出したものに違ちがひない』

甚六じんがさういひますと、三吉きちも合點がてんして、

『さうですく、此この分ぶんでは餘程よほど大きな錢瓶ぜにがめがあるに違ちがひないでせう。そいつを掘ほり當あてるまでは、何なんとしても仕事しごとを止やめることは出で來きません』

いへば四郎しろうも其尾そのをについて、

『明日あしたは一つ大勢おほぜいの人夫にんぶを雇やとひ入れて、トコトンまでやつて見みませう、此この分ぶんぢやアすばらしいのが出でて來きますぜ』

と、力瘤ちからこぶを入いれました。

其晚そのばんは何事なにごともありませんでした。

夜明よあけてから甚六じんは、先まづ親類しんるゐへいつて金かねを借かりて、人夫にんぶを雇やとひ入れて、豆畑まめばたけを掘ほりはじめました。此この日ひも彼方あちちから此方こちちから、澤たく

山さんの銅錢どうせんが出でて來きましたが、まだ肝腎かんじんの瓶かめには掘ほり當あてませんでし

た。
『もう一息いきだ、神様かみさまが五尺しやくした下しただと仰おつしやつたのも、或あるひは俺達おれたちに勉べん

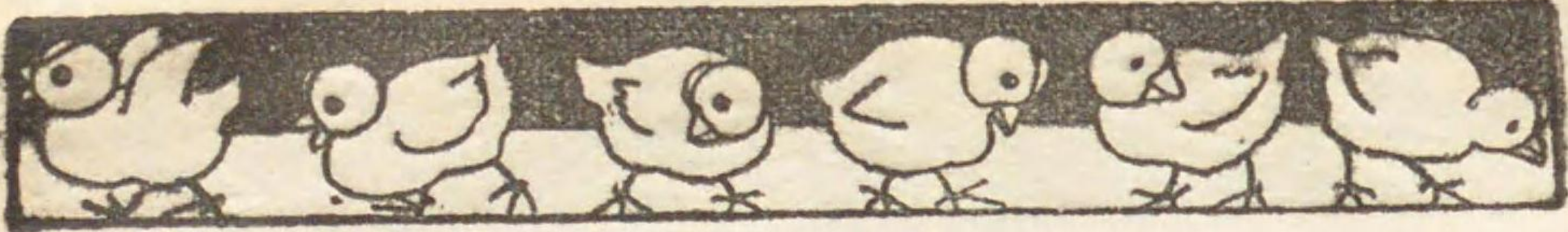
強きやうさせる考かんがへからかも知れぬ、明日あしたはもう五尺しやくほ掘ほつて見みよう』

と、又またしても人夫にんぶの數かずを増ますのでありました。

併しかし甚六じんの家うちは、それほどの金持かねもちではなく、人夫にんぶへ拂はらふ賃錢ちんぎんは、親類しんるゐや知合しりあひの家うちから借かりなければなりませんでした。

ところが最初さいしょのうちには、誰たれもいやな顔かほをせず貸かして呉くれましたが、あまり度々たびたびなので、親類しんるゐも鼻はなつまみなら、知合しりあひの中なかでも、

『もういゝ、加減かげんに止やめたらどうだ、夢ゆめに見みたことなんぞ眞まに受うけて、そんな馬鹿ばかな眞似まねして金かねを使つかつたら、今いまに乞食こじきに成なるだらう』
と、親切しんせつに注意ちういする者ものもありました。

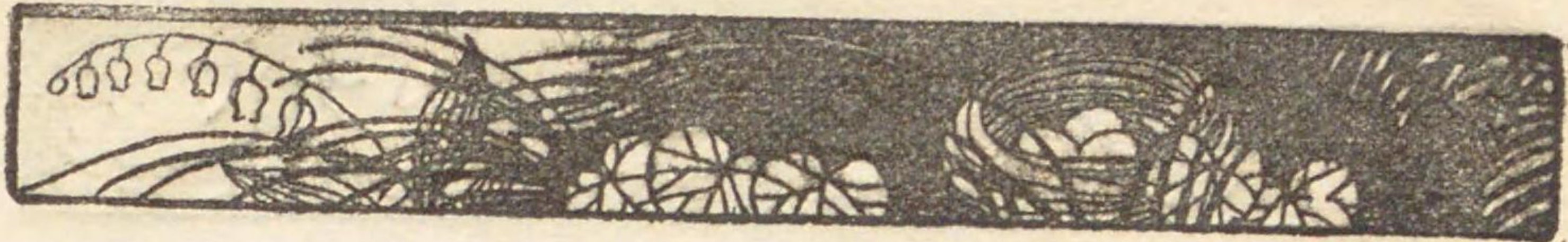


けれども甚六は、何としても思ひ切ること出来ませんでした。

『もう一日きりです。何しろ銅銭がかたまつて出て来るのですもの、瓶のない道理はありません。あの銅銭は、みんな瓶からはみ出したものです』

と、獨りて決めて信じ切つて居りますが、對手の者は嘲り顔に、『お前さんはさう思つてるかも知れないが、私を見る所では、狂人としか思はれない、狂人のする仕事に金を貸して何に成りますか、もう眞平々々』

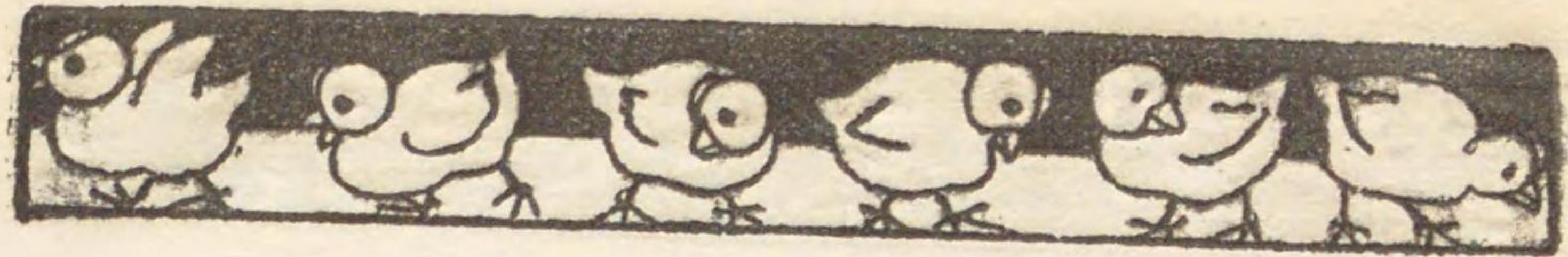
と、誰も相談に乗つて呉れませんので、甚六は人夫に拂ふ金もなくなり、家財も道具も残らず人手に渡して、猶も熱心に掘りつづけましたが、いくら掘つても掘つても、出るものは土と水ばかり、しまひには女房子供までが、甚六の狂人沙汰にあきれ返り、對手にし



ませんで、たうとう本物の狂人になつてしまひました。これといふも全く狐のたよりであらうと、土地の人は、嘲り顔に噂し合つたといひます。



鎌倉の大相撲



このお話は、古今著聞集といふ、名高い本に出てゐます。頼朝の家來の中で、島山重忠といふ大將の、強いことを記したものです。重忠は、日頃自分の力を自慢するこ
となく、どちらかといへば、隠してゐる位でした。

ところが或時、關東第一といふ角力の名人が、わざ／＼頼朝を訪ねて来て、是非に重忠と手合せをしたいと望んで出ました。頼朝も此の事に就いては、相當に心配しました。重忠も人前では、迎もこれに勝たれまいと思つてゐました。

併しいよ／＼となると、重忠の力は、關東第一といはれる力士よりも、はるかに優れてゐて、見る／＼これを負かしてしまひました。頼朝はホツと安心して、重忠の武勇をほめたたまました。對手は不具になつて、一生相撲を取ることが出来なくなつてしまひました。

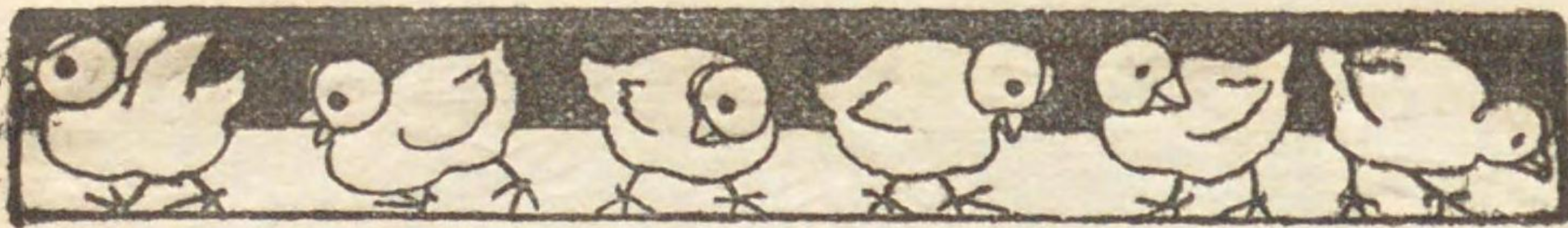
一 天下一の力士

源頼朝が、鎌倉の幕府に居りますと、一人の力士がたづねて参りまして、

『是非將軍様に、お目にかゝり度いと思ひます』

と、願ひ出ました。門番の者がその男を見ますのに、これは又とても大きな、雲つくやうな圖體をして居りますから、こんな奴に兎や角いつたら、どんな目に合はされるか知れないと、ブル／＼身を慄はせて、

『ハテ、困つた奴が來たものだ、將軍様に取り次いだら、どういふ問題が起るも知れぬし、此のまゝ追つ拂ふことも出来ないし、まあどうしたものだらう』



と、ひとりて思案をして居りました。

すると其力士は、待ち遠しさうに、

『貴様は俺を怪しい者と思ふらしいが、俺は決してさういふ者ぢやない。將軍様にお目にかゝつて、相撲の話でもしてみたいのぢや、早く取り次げ、貴様が承知をしなければ、俺はズン／＼通るぞ』

と、恐しい見幕で呶鳴りますので、門番は吃驚して尻餅つきながら、急いで此の事を頼朝の耳に達しました。

頼朝は、さすがに天下の權を握つてゐるほどの豪傑ですから、別に恐しいとも怪しいとも思はず、

『さうか、其力士をこれへ呼べ、庭に居らせて對面して見よう』
といひました。

門番はホツと安心して、又立ち歸り、

『お前さん、將軍様が會つて見ようと仰しやる、どうか庭の方からお通り下さい』

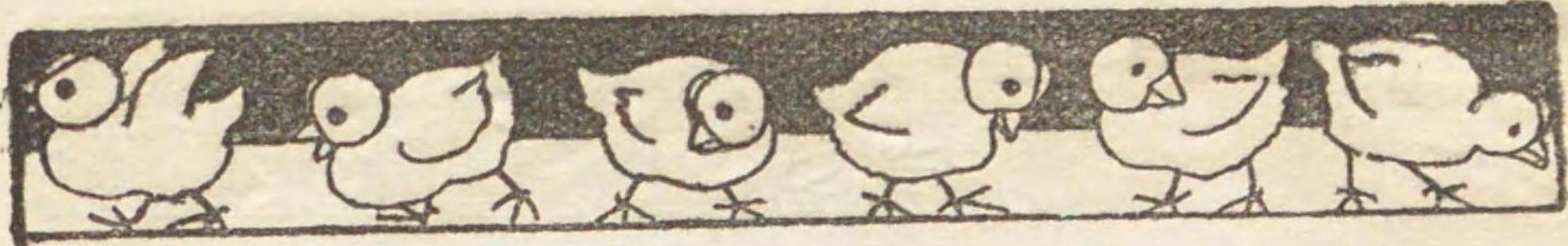
と挨拶しますと、力士はニツコリ、

『それ見ろ、將軍様はそのやうによく物が解つて居る、貴様のやうなヤクザ者は、こゝの門番するだけの價値がないぞ』

ズシン！ズシン！と地ひゞき立て、さつさと門を入りました。

頼朝は、恐しく大きな力士が、面會に來たと聞いて、もし萬一のことがあつてはならぬと、大勢の家來達を左右に並べ、簾越しに、庭へ來た男を見ますのに、成る程話にきいた通り、雲つくやうな大男ですから、

『其所に居る力士、名は何と申す、して又用事は何か』



と、家來の一人を以て、問はせて見ると、力士は一寸頭を下げて、
 『ハイ、私は長居と申しまして、關東八ヶ國には、敵手に成り人が
 御座りません、まことにケチな相撲取では御座りますが、成らうこ
 となら將軍様の、御家來衆の中から一人、これぞといふ人を選び出
 させ、一番手を合せて見度いと存じまして……』
 と、思ひの外に大きなことを申しますので、頼朝も長居の様子を
 憎らしく感じて、

『ウムさうか、長居とやら、其方は、俺の家來の中で、誰を望むの
 ぢや』

聞いて長居はカラ／＼と笑ひ、

『さア、見渡しましたところ、どいつもこいつも、これぞと思ふ程
 の者も居りません。まア無理に選びますれば、島山重忠位のもの

てせうな』

と、あたり構はず、勝手な廣言に、並び居る大名達も、すつかり
 膽を潰してしまひました。

二 頼朝への註文

かういふ次第で、頼朝もどうしたものかと、當惑して居ますと、
 都合よく重忠が、ツカ／＼と入つて来て、大名の間を通りぬけ、頼
 朝の座席に近く座つて、丁寧に挨拶をしました。

すると頼朝は、大きに安心の様子で、
 『オ、重忠か、よく来た、待つて居たぞ、近う寄れ／＼』
 と、いひましたが、なぜか重忠は動かからともしませんでした。

頼朝ははがゆさうに、



『重忠！ 其方にチト頼みがあるのぢや、これは甚だしい憎いことではあるが……』

かういはれても重忠は、まだ黙つて居ります。そこで頼朝は重ねて、

『重忠！ 其方はなぜ黙つて居るか、俺の頼みといふのは、なかなか重いことぢや、いふまいかと思ふが、それでは頼朝の面目にかゝる、さて困つたことぢや』

と、當惑さうにいひますと、今まで黙つてゐた重忠は、俄かに起ち直つて、

『ハッ！ 殿様の御一大事、どんなことかは存じませぬが、重忠身を以てお引き受け仕りまする、さ、さ、早く仔細を承り度う存じまする』

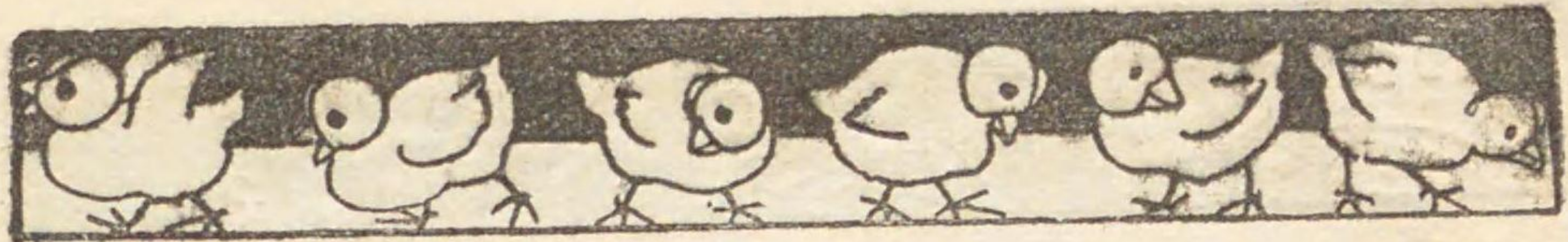
と、恭しく頭を下げるのでした。

重忠の心よい返事をきいて、頼朝はホツと胸を撫で下しました。そして庭の方を指し示して、

重忠！ あれを見ろ、あの庭に居る大男、長居とやら申す力士、關東八ヶ國に手合せする者一人もないと、最前から廣言を吐いて居る、そればかりでなく、將軍の家來の中で、選手を一人出せと望みををる、誰をと問はせたら、他の者は駄目だから、重忠をと所望するのぢや、若し其方が來て呉れなかつたら、かくいふ頼朝が、自分で手合せを致さうかと、かうまでも思つたところぢや』

と、詳しく譯を打ち明けますと、重忠はびつくりしたやうな顔をして、只もう深い考へに沈むのでした。

頼朝は重忠の心のうちを充分に察して、



『何しろこれは將軍家の名譽にもかゝはる一大事である、是が非ても、其方の力を借りなければ……』』

と、小聲で二度三度促しました。

重忠はどう思つて居りませうか、あの雲つくばかりの大男と、よし手を合せて見たところが、逆も勝たれる見込みはない。さうかといつて、長居が名をさして對手にしようとするのを、このまゝ引つ込んでしまふのも、あまり卑怯な話であります。

負けるも恥、出ぬも恥、將軍様に恥をかゝせることには、何の違ひもありません。重忠は不圖考へました。

『さうだ、出て見よう、力づくで行かなければ、智慧で負かせぬこともあるまい』』

と、かう思つて、其まゝ別室に入りました。こゝで重忠は、相撲

の仕度をするのでした。

庭の床几に腰かけて、待ち受けて居る長居は、もう待ちくたびれた様子で、

『重忠はどうせられました。もうよい加減に出てもよさうなものだ』』

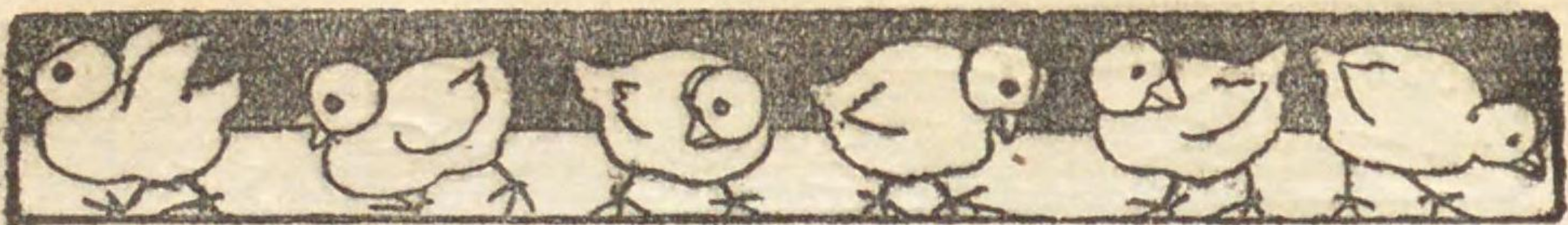
と、ブツ／＼催促をしております。

すると重忠は、ゆつくり身仕度をして、頼朝の前に出て両手をつき、

『將軍様、それでは長居と手合せを致します』』

と、ニツコリ笑ひました。重忠はもう決死の覺悟をしてゐるので、頼朝は、重忠の様子を見て、

『よくやつて呉れ、天晴名を汚すなよ』』



と、心から勵ましました。重忠の兩方の目には、涙の玉がキラキラと光つてゐます。

三 重忠の決心

重忠は、しづく〜と庭に下り立ちました。もう待ちくたびれてゐる長居、かくと見るより床几をはなれて、

『ヤア、重忠殿！ 私は關東八ヶ國に、並ぶ者もない相撲の名人ぢや、鎌倉幕府の中で、對手にしようと思ふのは、まア貴方一人ぐらゐのもの、今日は是非一つ手合せして貰はふと、わざ〜出かけて参りました』

と、大きな聲で、神妙に挨拶をしますと、重忠も至極落ちつき拂つて、

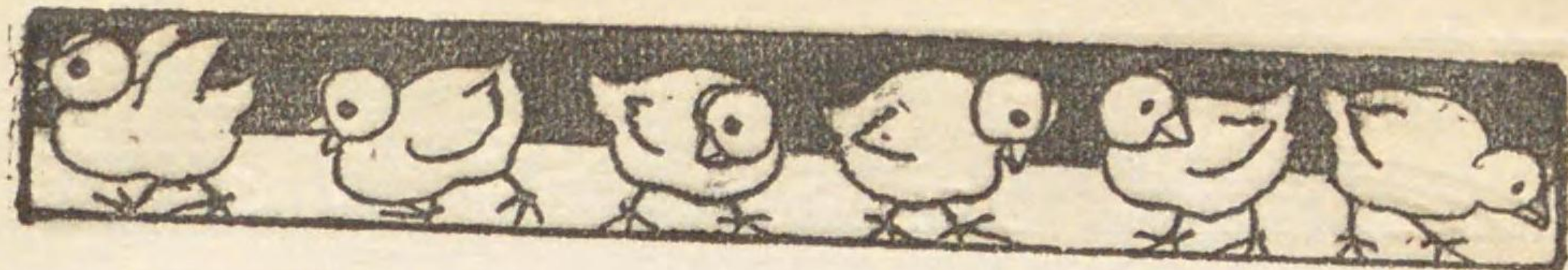
『どうぞ宜しく』

と、只それだけ答へてゐました。

誰が見ても、此の相撲は、重忠の方に勝ち目があらうとは思はれません。一方が芋虫なら、一方は蟻のやうなものです。けれども其芋虫も、時によつては蟻に食ひ殺されることがありますもの、殊に覺悟して出た重忠の、そんなに脆く負かされるでせうか。

上段の座に構へて、二人の様子を眺めて居る頼朝は、どんなに心配してゐるでせう、若し萬が一にも、重忠が勝つて呉れ、ばよいもの、負けてもすれば、幕府の威光にもかゝります。頼朝の家來は、何百何千人とある、その中で、只の一人も、長居に勝つ者がないと、から世の中に知られたら、こんな面目ない事がありますせうか。

並び居る大名小名達は、これもみんな同じ思ひで、わく〜し



て居ります。

やがて双方一禮して、庭の芝草を踏み鳴らし、立ち上ると共に、

『ヤツ！』

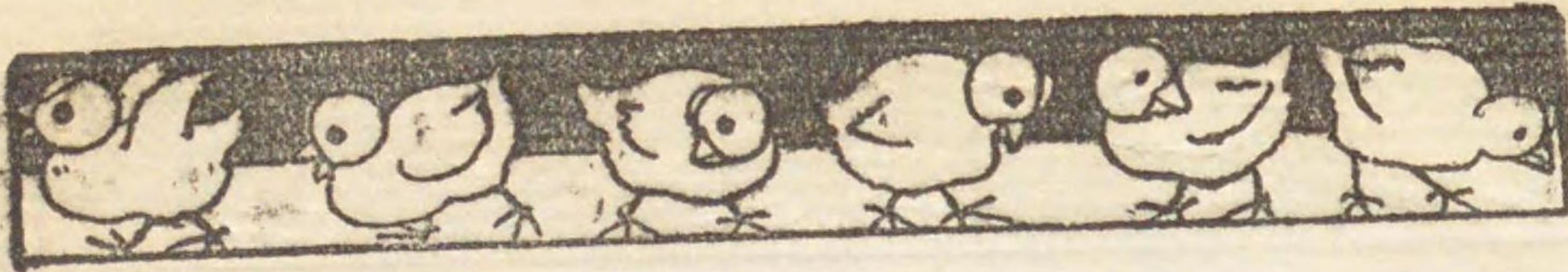
と聲かけて、組みはじめました。

長居は得意の手を以て、重忠の首をたつき、袴の前腰を取つて、宙に投げ飛ばさうとするのを、重忠もさる者、小兵ながら、長居の肩をぐつと押して、なかく近づけ得させません。

『小癩な！』

と、鋭く衝いて来ますが、重忠の體は、岩よりも重く、さすがの長居も、いよゝゝ疲れて、額から玉のやうな汗が、ポタ／＼と落ちかゝります。

組んだまゝで、ビクとも動かずに、何分か時が経ちました。



最前から、頼朝の側に控へて、ぢつと相撲の様子を見てゐた梶原

景時は、もうよい頃合と思つたか、

『將軍様、兩人の相撲はこの通り、何れ劣り優りのないものと存じまする、引分けといふことに致しませう』

と、口を切りました。それといふのは、あまり長く戦はせて、小兵の重忠が、もし破られでもすれば、折角の相撲も、花も實もないものと成つてしまひますから、これは勝負なしといふことで、双方に花を持たせようといふ考へからです。

けれども頼朝の見るところは少し違つて居りました。こゝまで来れば、勝負は却つて重忠にあるものと、確く信じたので、景時の説には従はふともせず、

『イヤ／＼、勝負をつけさせよ』

と、いつにない鋭い聲が、重忠の耳にも、はつきりと聞えたらしく、

『エイ、ヤツ！』

と叫んだ時、雲つくやうな長居の體は、ドシーンと地ひびき立て、芝草の庭にめり込んで居りました。

『萬歳！ 勝つたいくくく』

躍り狂うて、高く叫び上げる関の聲は、天地を揺り動かして、さしもに宏大な幕府の屋臺骨までが、グラくと、大地震のやうに震ふのでした。

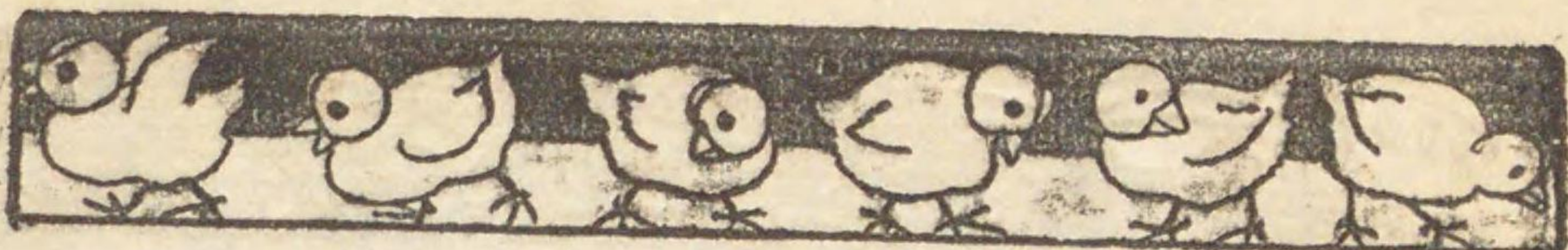
頼朝の満足はどんなでありましたらう。あゝこれこそ、まづ世間に申譯が立つと、はじめて安心の胸を撫で下したに相違ありません。

重忠はと見れば、一向に勝つたやうな顔もせず、袴の皺をとり繕うて、恭しく頼朝に挨拶をしてゐます。

四 腕の力

一方の長居は、この一戦に脆くも敗れたばかりでなく、重忠の力が餘つて、大地に首を挫かれ、其まゝ息も絶え果てましたので、かくと見た頼朝は、
『長居を助けよ、息を吹き返してやれ』
と命じました。頼朝にしてみれば、この大男が負けたればこそ、自分の家來の名が、一入高くなつたといふものゝ、敵ながらも天晴の者である、却つて大きに同情をしたのでせう。

『長居が死んだ、ソレ水だいく』



『イヤ重忠殿は、見かけによらぬ剛の者だ』

『やつぱり長居が名ざして来ただけある、恐れ入つたものさ』

『それにしてもこの長居といふ奴、案外脆くやられたなア』

と、噂とりく、手を取つたり、足をかついたり、首を擡げたり

して、やつとの思ひで凹地から助け出し、水を吹きつけ、氣つけを

飲ませ、背をさすり、頭を冷やして、頻りに介抱致しますと、

『ウーン』

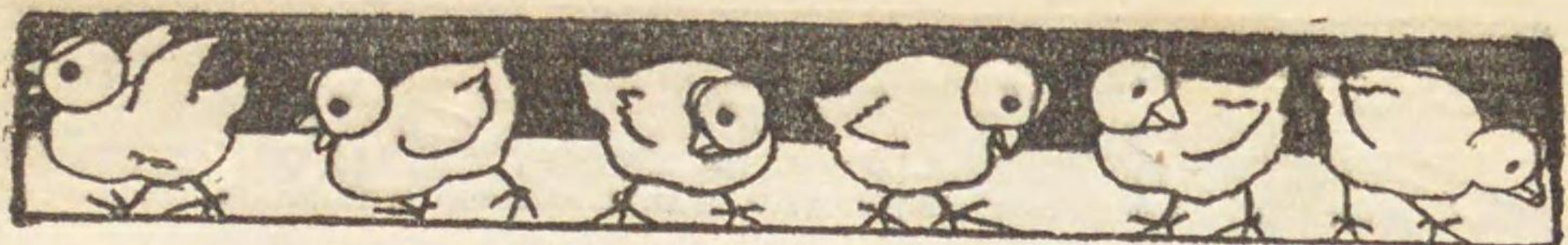
と一聲、息ふき返して、目ばかりパチ／＼、

『あゝ、肩が痛む、肩が痛む』

と、苦しさらに呻りますから、どれ／＼と皆々寄つて、肩のあた

りを検めて見ますと、兩方共に骨が碎けて、手の自由さへき／＼さう

もありません。



『ヤ、ヤ、これは酷いことに成つて居る、重忠殿の腕の力は、鐵か

石か、只のものではないらしい』

『全くこの大男の太かい骨が、からまで微塵に碎けたとは、よくよ

く強い力だなア』

と、いづれも舌を巻いて驚きますと、當の長居も溜息ついて、

『恐れ入りました。重忠殿は、何としても只人では御座りません。

私の肩を兩手で壓された時、メリ／＼と音して、骨の碎けるのを覺

えました。大したこともあるまいと、汗だく／＼で我慢をして居

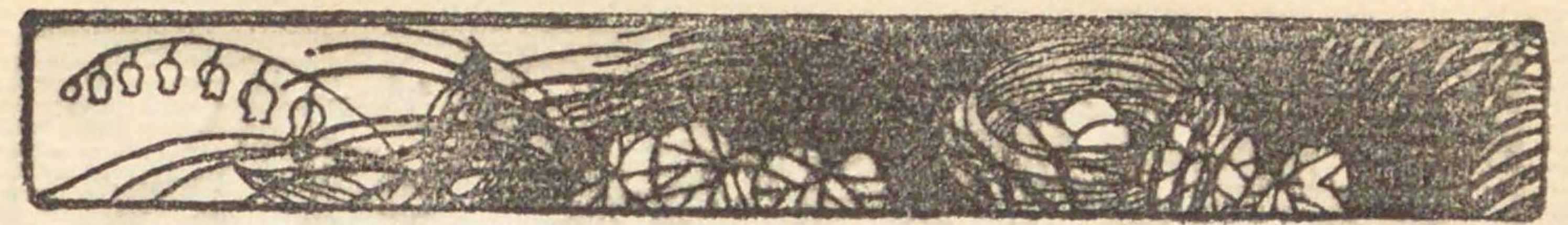
りました。イヤどうも、えらいお方で御座りまする』

と、これも舌を巻いてしまひました。長居はこの時の相撲によつ

て、たうとう不具者となり、もう一生涯相撲を取ることが出来ませ

んでした。重忠は、頼朝から、特別の御褒美を貰つたこといふまで

もありません。



—(終)—

大正十五年七月二十二日印刷
大正十五年八月五日發行

海幸山幸
奥付

不許
複製

正價金壹圓

編者 巖谷小波

發行者 山添平作

印刷者 田村久惠

印刷所 洋南堂

發行所

東京市本郷區
本郷四丁目

文

武堂

振替東京九五二七番
電話小石川三一三六番

巖谷小波先生編 全十二冊 各冊正價一圓 送料各八錢

模範童話文庫

各冊四六判……裝幀優美……函入美本
口繪及び着色挿畫數葉入……本文十二ポイント

みな様、おなじみの小波先生の童話の叢書、素敵に美しい、迎もおもしろい、そして爲めになる、読んでも読んでも飽くこと知らぬ、三拍子揃ったよい御本、ずらりと並べて十二冊、毎月一冊づゝ出来ることゝなりました、どうか「文武堂の課外雑誌」同様に、お友達を誘ひ合はせて、御愛讀下さいますやう、切にお勧め申し上げます。

鬼退治 既刊好評

海幸山幸 同

からいと草紙 近刊

牛若丸 近刊

かぐや姫 近刊

曾我兄弟 近刊

發行元 東京本郷區本郷四丁目 文武堂出版部

◎誌雜外課的範模の行發堂武文◎

同一月每 同一月每 同一月每 同一月每 同一月每
行發日一 行發日一 行發日一 行發日一 行發日一

幼女エバナシ

常尋 小學一年

常尋 小學二年

常尋 小學三年

常尋 小學四年

定價 金二十五錢 送料五厘
半ヶ年分 金一圓五十錢
一ヶ年分 金二圓八十錢

定價 金三十錢 送料一錢
半ヶ年分 金一圓八十錢
一ヶ年分 金三圓四十錢

定價 金三十五錢 送料一錢
半ヶ年分 金二圓
一ヶ年分 金四圓

定價 金三十五錢 送料一錢
半ヶ年分 金二圓
一ヶ年分 金四圓

定價 金四十錢 送料五厘
半ヶ年分 金一圓四十錢
一ヶ年分 金四圓七十錢

すまり居で次取に店書國全は捌賣



